社会福祉法人　光徳子供学園

学園だより

学園通信
令和8年
第1号

学園再建の二年間

理事長　田中浩之

学園再建に職員の皆さまが取り組んで頂いた二年間について、令和六年度と令和七年度の事業報告書で振り返ってみたいと思います。

事業報告書には、最初に入退所状況が記されています。令和六年四月の初日在籍数は、九名でしたが、令和七年四月には十三名に増えていき、令和八年三月末に二十名になりました。定員が三十名なのでまだまだですが、現在の建物では二十四名で満床となります。そう考えると子どもの在籍数だけについて言えば、再建までもう一息だと言えます。

次に記されている一時保護受託状況ですが、令和六年度が十六名だったのに対し、令和七年度はその三倍以上の五十二名となっています。一時保護は本来児童相談所で行うものですが、児童相談所の一時保護所に空きがない場合には施設等に委託される場合もあります。一時保護受託が三倍以上に増加したことは、県に対しても段々と役立つ学園になってきていると思えます。

そして、ショートステイ、トワイライトステイと呼ばれる子育て短期支援事業ですが、令和六年度の五十二件に対し、令和七年度は百二十一件と倍以上に増加しています。

子育て短期支援事業は、大山町や米子市などの市町と契約をして行われますが、地域の保護者が疾病や疲労、事故等で養育について困っている場合に施設等が子どもを預かることで子育て家庭を応援するという本当に意味のある事業です。

子育て短期支援事業はやればやるほど人件費的に赤字になると言われている事業ですが、それでも敢えて受け入れている理由は学園が家庭で養育できない子どもを受け入れるだけではなく、地域の在宅の子どもやその家族を支援していくことを目指しているからなのです。

学園再建は、従来の児童養護施設としての学園に立ち返るだけではなく、更に地域の子育てを支援する機能を持ち、学園が地域の養育の要となっていくことなのです。

数字の変遷だけでは語れない、いろいろな思いがけない出来事が次々とあった二年間ですが、園長をはじめ、職員の方々はよく頑張って来られたと思います。本当に有難うございました。

これからも子どもたちに役立つ、地域の家庭に役立つ、鳥取県に役立つ光徳子供学園を創っていって頂きたいと思います。どうか、よろしくお願いいたします。

「改良」から「改善」へ

園長　遠藤　正裕

一昨年の「改革」から三年目を迎えました。県の指導・支援を受けながら、トップダウンで我武者羅に突き進んだ一昨年とは異なり、昨年は「改良」の一年となりました。

副園長、統括主任をはじめ、保育士、児童指導員、心理士など計七人の職員が加わり、崩れていた組織も基本構造に戻すことができました。また、スピード感に加えて組織的なチーム対応ができるようになりました。その結果、市町村からのショートステイ・トワイライトステイは前年比の二倍以上、県からの一時保護は三倍以上、入所も二倍以上を記録しました。

さらに、昨年はファンクラブ（後援会）の立ち上げと、クラウドファンディングにも挑戦し、たくさんのご縁とお力添えをいただきました。そのおかげで、地域での貴重な自然体験や社会経験のほか、大学進学に向けての準備も安心して進めることができました。

一方で、課題も浮き彫りとなりました。七月には個人情報保護、一月には養育に係る不適切な事案が発生しました。いずれも未だ脆弱である組織体制が露呈した形となりました。

このことを受けて、今年は再発防止も含めて「改善」の一年にしたいと思っています。再び県の指導、県児童養護施設協議会の支援、全国アドボカシー協議会の協力をいただきながら、よりよい子ども支援のあり方を模索していきます。また、「人材育成の指針」を示し、キャリアデザインを描きながらともに成長していく職員集団を目指します。

今年は五名の新任職員を迎え、学園に新しい風が吹いています。このほか、昨年末から看護師（非常勤職員）による健康管理、今年から助産師（外部講師）による性教育を毎月実施しています。こどもたちも個人や集団で登下校したり、こどもたち同士で仲良く遊んだりするなど、自走する力がついてきています。

一昨年から学園の門戸を開き、こどもも職員も自然な解放感を感じ始めています。学園に来てくださったり、地域で迎え入れてくださったりする方が増え、こどもとともに職員の社会性もどんどん育まれています。今年も関係機関や地域の皆さんに支えていただきながら、一人一人のよさや課題を成長の糧にして「光り輝き　徳を重ねて」いきたいと思いますので、引き続きよろしくお願いいたします。